

● CNC P はあなたが参加し楽しく議論し活動する場です ●

シリーズ「土木ということば」

第 7 回明治官制で「土木」が浮上

鎌倉、室町から江戸と武家政権が続き、「土木」に代わって幕府の奉行職名である「作事」、「造営」、「普請」が使われ、「普請」は城、道路、堤防などをつくる意味にも使われるようになった。江戸中期の漢語辞書『雑事類編（柴野栗山）』（1764年）では、普段使われることばを見出し語として、それに対応する漢語を示しており「フシンスル 營造。興造。興作。土木」となっている。

それまで漢詩、漢文をたしなむ公家や学者に限られた範囲で使っていた「土木」が、明治新政府で公けに使われるようになった。現在に至る「土木」の直接の起源である。慶應四年（1868年）五月『太政官布告第三百九十五号』「國家多事之折柄軍資ヲ始メ總テ莫大之御費用ニ付土木之功ハ勿論 朝廷御用費ヲ始メ諸事御省略被 仰出候事」で公文書に「土木」が使われ、明治二年（1869年）五月に民部官のもとに「道路橋梁堤防等當作ノ事ヲ專管スルヲ掌ル」「土木司」が置かれた。「土木」の官職名は中国、日本の歴史上初めてのことである。

新政府は官報『太政官日誌』で布告の全国への普及をはかり、併せて新語辞書を出版した。慶應四年（1868年）官版『新令字解』に「土木 トボク フシンスルコト」とある。戯作版元による絵入りの明治三年（1870年）『童蒙必読漢語図解初編』には「土木司 どぼくし おさくじをいふ」とある。

ここに「土木」という漢語は改めて「作事」、「普請」という意味も獲得して、その後、慣用よみの「ドボク」という発音で世間に普及していった。

（土木学会土木広報センター次長 小松 淳）

Vol.55 コンテンツ

巻頭言	土木偉人をたずねて、新しきを知る	依田 照彦	2
コラム	協働推進部門の今後の活動	岩佐 宏一	3
トピックス	総会後の粉川武蔵大学教授の講演の報告	高橋 肇	4
NEWS	市民社会を築く建設大賞 2018 受賞式	谷戸 雄紀	5
部門活動紹介	土木と市民社会をつなぐ活動	田中 努	8
シドニー視察旅行記（12）	「ジャカラダ」への小さな恋の物語	塚原 健一	11
会員からの投稿	荒川下流における市民の活動	三井 元子	13
会員紹介	（特非）道路の安全性向上協議会		15
事務局通信			16